

提出日：令和 3 年 2 月 25 日

所 属：獣医学部 獣医学科

氏 名：金井 詠一 職位：助教

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

獣医学科臨床系科目の教育活動・研究活動を行っている。主たる教育活動は小動物腫瘍学、小動物外科学、獣医放射線学を担当している。現在、卒業論文については自身の研究室移動に伴って、獣医放射線学研究室、小動物外科学研究室内の学生を指導している。課外活動としては、準硬式野球部の顧問である。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
獣医放射線学	獣医学科	必	2, 4	140
小動物獣医総合臨床	獣医学科	必	5	140
先端獣医療	獣医学科	選	6	10
総合獣医学	獣医学科	必	6	140
獣医放射線学実習	獣医学科	必	5	140
獣医外科学実習	獣医学科	必	5	140
小動物臨床実習	獣医学科	必	5	140
小動物病院実習	獣医学科	選	6	10
卒業論文	獣医学科	必	5, 6	10
獣医学特論	獣医学科	必	4, 5, 6	10

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

学生には自らの知識や技術で対価を貰うプロフェッショナル（国家資格有資格者）としての自覚を芽生えさせ、社会のニーズに合った知識や技術を提供できるような人材を育成したい。プロフェッショナルとして必要な知識や技術を主体的に常にアップデートしていく必要がある。現代の情報社会では最新の情報をすぐに大量に得ることができる。しかし、それらの情報を個人的にインプットのみでは、正確性や整理整頓に限界がある。大量の情報を正確かつ効率良く得るためには、仲間（チーム）と情報共有してディスカッションしていく必要がある。そのためには、自身の得た知識や技術を整理し、他人に正確に伝えられる「人にモノを伝える力」が必要となる。「人にモノを伝えることのできる学生」は自ずとインプットできるようになると考えている。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方, 方法）

上記の理念を実現するために所属校では、学生が「獣医学に対する飽くなき探究心を持ち自ら学ぶ」、「チームワークや pay forward を大切にする」、「人にモノを伝える力」という方針で教育している。

「獣医学に対する飽くなき探究心を持ち自ら学ぶ」

- ・ただの暗記ではなく、今までの知識を基に考えて導き出すような思考回路を身につける。
- ・卒論指導学生には興味のある分野で外部の機関にもお世話になり、獣医学のみならず様々な視点から物事にアプローチできるようにしている。
- ・病院実習においては、まず診断スキルを身に付けてもらうようにしている。

「チームワークや pay forward を大切にする」

- ・研究室の論文ゼミではチーム分けをし、メンター制度を導入している
- ・実験チームによっては勉強会や論文ゼミを別途行っている。

「人にモノを伝える力」

- ・論文ゼミでプレゼンテーションしてもらっている。
- ・外部の人との交流を持ち、幅広い業種の方と接点を持つことで、多角的な考え方を身につけるようにしている。

アクティブラーニングについての取組

自主的な論文ゼミを行っている。また、興味のあるテーマを決めて2週間に1回、学生主体の勉強会を行っている。

ICT の教育への活用

上記の資料や録画動画をクラウドで保管、共有している。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業、実習）の創意工夫（B）

②学生の理解度の把握（C）

③学生の自学自習を促すための工夫（B）

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A）

⑤双方向授業への工夫（B）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

講義では暗記ではなく、理解させることを心がけている。学生の理解度を把握する手段は、座学では授業評価と定期試験のみであった。実習は、本年度においてはコロナ禍の影響で主に少人数とのやり取りであったため、理解度の把握やコミュニケーションがしやすく、概ね良好だったと感じている。自学自習や双方向については卒論指導対象者については実施できている。対象が大人数になると薄れてくる。

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。

総合獣医学では、過去 3 年の試験問題の傾向を把握し、臨床現場に則した臨床的思考に基づく講義を行った。特定の疾患に対して「なぜ？」その検査や治療が行われたかを理解する講義を行った。

5. 学生授業評価

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

自身が授業評価で直接コメントを貰うことは少なかったが、自身が担当する科目では教員によって両極端な評価がなされている。それぞれの先生の講義方法を把握し、良い点を取り入れるようにしている。

② ①の結果はどうでしたか。

授業評価では明らかな効果はみられなかった。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

コロナの影響でオンライン（ライブ配信）と対面の両者を同時に行う際の方法を考えていく。

6. 学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

卒業論文指導者との症例検討会や輪読会を行っている。自ら調べて、アウトプットする力を養っている。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

卒業生が大学院へと進み、海外留学をする予定である。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

診療業務とかぶらないときは極力参加している。オンラインの録画配信はとても助かる。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。

短期的な目標

ポストコロナへの対応を考えていく。デジタル化が加速したが、一方でアナログの良いところを見直す機会となった。両者を融合し、教育効果の高いコンテンツを生み出していく。所属研究室を移動して業務内容が移行中なので、ミスのないよう心がける。

長期的な目標

外部機関との研究を通じ、様々な分野で活躍できる獣医師を育てていく。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

- シラバス
- FD 研修
- 授業評価、メールのやりとり